

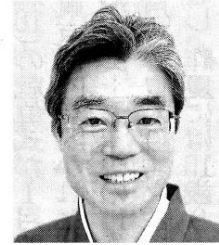
朝を
ひらく

寺でのある日の出来事。深い反省と気づきを伴った体験であった。きれいな夕焼けが西の空を染め、境内にある障がい者用の作業所で働く修行生（一般的には利用者と呼ばれているが、私は修行生と呼んでいる）が帰り支度をしている時だった。

「ろうそく12本と線香6本ください」。寺で販売している線香とろうそくを指さして修行生Kさんは言った。値段表は大きく窓に張り出している。ろうそくも線香も1本30円。私は分かりやすくKさんに、30円×18本は、540円と紙に書いて説明

思い込みのワナ

永田 円了
真国寺住職



した。しかしKさんは計算がうまくできない様子で、「460円」「460円」と言い張る。私はもっと分かりやすいように、ろうそくと線香を台の上に一本ずつ並べて、540円になることを何回か繰り返し返した。ふとKさんの左手にお札が見えた。千円札である！

ああ！なんとしたことか。Kさんはお釣りをすでに計算して460円と言っていたのであ

る。一瞬間が真っ白になる。発達障がいがあるKさんには、この計算はうまくできないだろう、と勝手に思い込んでいた自分が恥ずかしく、ゴメンナサイ、とKさんに深く頭を下げた。

人間というものは、無意識に人や物を色分けする。あの人はいい人だ、あの人はイヤな人だ、なんにもできない人だ、などと勝手に決めてかかる。その判断基準は次の三つ―私の経験、私の考え、私の感情。これら三つの要素を頭の中で重ね合わせて判断をくだしているように思う。

冬に近づく秋のある日、こんなこともあった。寺の境内には

紅葉を終えた桜やモミジの葉が散り始めていた。修行生数人が竹箒で落ち葉掃きをしている。その作業中も落ち葉はどんどん落ちてくる。彼らは落ちてくる葉を気にする様子もなく、地面の落ち葉を掃いている。

落ち葉がみんな落ちてから掃き掃除をしてください、と言いたい衝動に駆られた瞬間、ハッとした。これは、禅だ。落ち葉を掃くという行為（プロセス）と、参道をきれいにすること（結果）を分けない考え方。たとえ掃き終えた後から落ち葉が舞い落ちようとも、動かす竹箒のひと掃きひと掃きに充実感を持つ意識。一方、望むゴールに効率的に到達するための近道を求める私たち。障がいを持ちながらも、もくもくと無心で落ち葉を掃く修行生の後ろ姿に、禅を教わった瞬間だった。

無意識の色分け反省